

18) ツルボ＝蔓穂

ツルボはユリ科の多年草である。北海道から南西諸島、朝鮮半島、中国、ウスリー地方などに分布し、日本各地の陽当たりのよい土手や田の畦、海岸の崖地、原野などに生える。草丈は10～40cmほどで、葉の間から総状花序を出して、淡い桃紫色の小さな6弁花を多数つける。和名の由来は定かではなく、『連穂』がツルボになったという説が有力である。また他の説ではツルボは食料になり、球根の外皮をとると、つるりとした坊主頭に似ているために、「ツルボウズ」が転訛して、「ツルボ」になったという。なるほど面白い説である。しかし植物の名前の由来に理屈を求めるのは危険である。別称としてスルボ、オショーク、ウルシノビル、サンダイガサともいわれる。サンダイガサは「参内傘」のことで、昔、お公家さんが、宮中に参内するとき、お供のものが持参した長柄の傘を畳んだ形が、花序の形に似ているためとする説もある。学名は『*Scilla scilloides*』で、属名はシラー属(01-01-08 シラーの項参照)からの転用で、種小辞はツルボ属のようなという意味である。イギリスでは『squill』で、中国では『錦棗児』である。

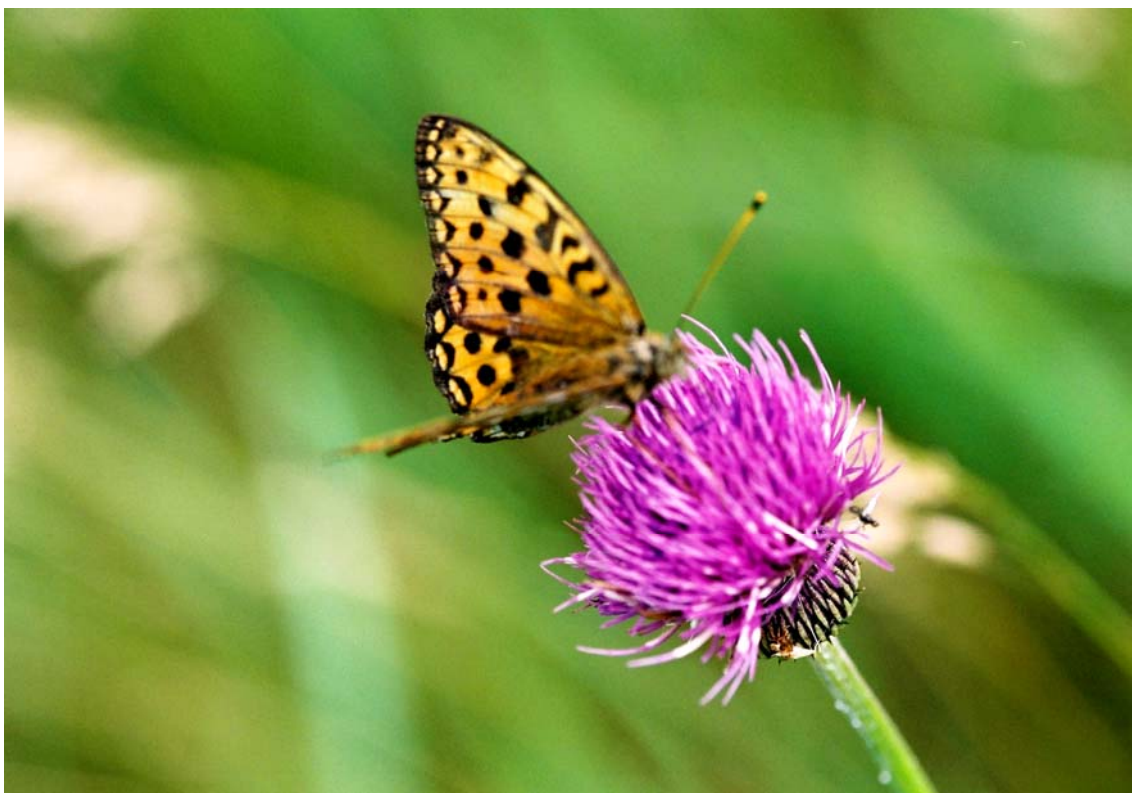
ツルボは、他の雑草類に混じって田畑の周辺や神社の参道周辺、海岸の草地に生育するなど、目立つ花のないところで群生して咲くことが多い。このため9月上旬から10月にかけて突如として花が目立ってくる。しかしよくよく観察してみると、ツルボは春の芽出し後に葉を広げて薫風を十分に謳歌した後、一旦地上部が枯れて、真夏の盛りには休眠して過ごす。冬眠をして過ごす生物は動物も植物も広く知られているが、夏眠を取る生物はあまり知られていない。しかし意外に多く例えば蝶の仲間ではタテハチョウ科のヒョウモンチョウ類(01-02-07 スミレの項参照)などは毎年お盆休みをきっちり取って、秋風が吹き始めると出てくる。ツルボも同様で都合が悪い季節は寝て過ごし、夏場に草刈機で頭を刈られることのない幸運の持ち主なのである。

15世紀に記された中国の文献に『救荒本草』(キュウコウホンゾウ)という書物がある。この書物には救荒作物のことが記され、飢饉や戦乱などで、米や麦、アワ、ヒエなどのまともな食料が得られなくなったとき、どのような草を食べて生き延びれば良いかを記しており、この中にはツルボの記述もある。加藤清正は豊臣秀吉の命により朝鮮半島に遠征した折、この『救荒本草』を日本に持ち帰ったため、ツルボの球根が食用になることが再認識されるようになった。ツルボの球根には澱粉質が多く含まれ、径2～3cmで卵球形の鱗茎は食用になる。鱗茎をよく水洗いした後、すり鉢ですり潰して、「ツルボ餅」とすることが多かったが、水でよく洗った後、煮て食べたりすることもあった。粉にして貯蔵し、必要に応じて餅にすることも行なわれていたようで、飢饉のときには食料とし大いに役立ったのである。

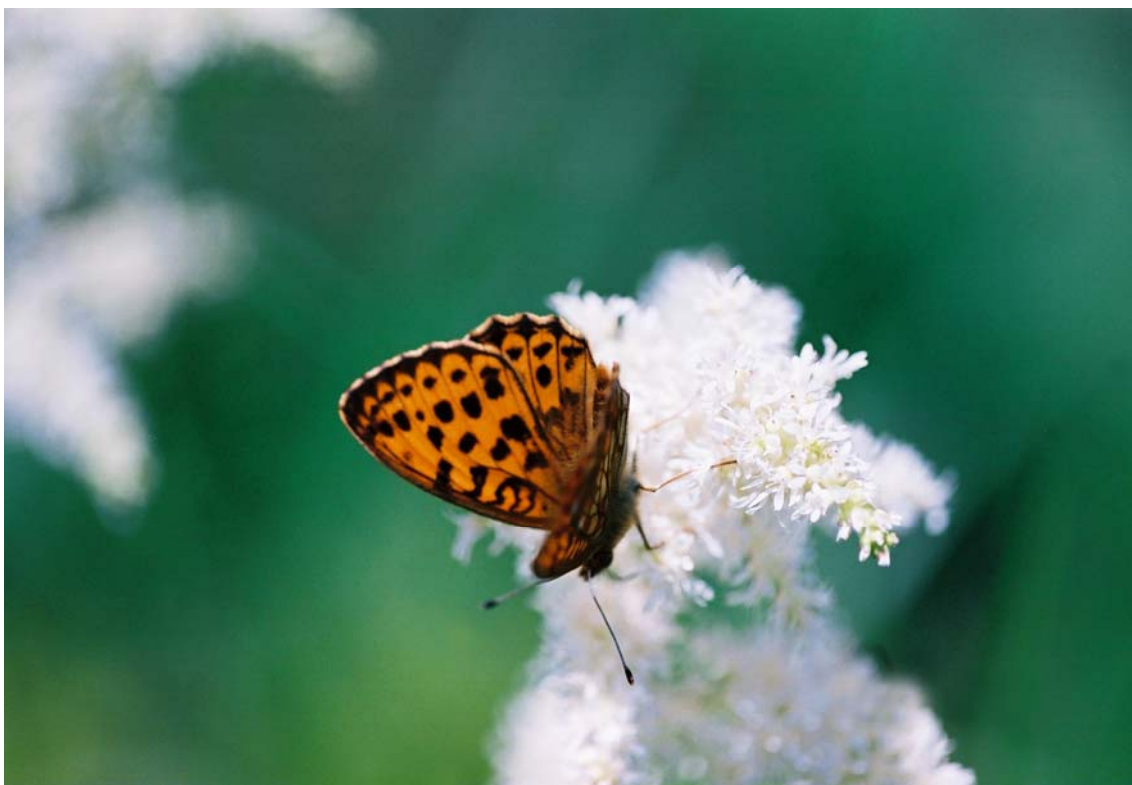
またツルボは薬用としても用いられ、腰痛、ひざの痛み、打撲傷に、すりおろした鱗茎を、患部にすり込み、塗布してガーゼでおさえるとよいとされている。



ツルホは草むらの脇や土手などで、群れて咲くことが多い(栃木県佐野市)。



お盆の頃は夏眠をして過ごすヒョウモンチョウ(ミドリヒョウモン)の仲間。夏眠をとる動物類は結構多く、へびなどの爬虫類のほか、魚類などにも見ることができる(長野県蓼科高原)。



吸蜜するウラギンヒョウモン。夏休みをとったあとの姿である(長野県地蔵峠)。

[目次に戻る](#)